



ARGONAUTES

別府大学図書館報

アルゴノートNo.50

CONTENTS

私の読書遍歴

- ～学生の皆さんへ戦略的読書のお勧め～ … 関谷 忠
- むかし、大学生のころ読んだ本について … 大嶋美登子
- 「大人の選ぶ本はつまらない」…………… 澤西 祐典
- 絶版児童書の宝庫へどうぞ…………… 佐藤 慶子
- 別府大学図書館友の会 FOBUL の活動について … 石川 賀一





私の読書遍歴～学生の皆さんへ戦略的読書のお勧め～

国際経営学部長 関 谷 忠

はじめに

読書の醍醐味は何でしょう。人はいろいろ経験することにより成長していきます。しかし人が実際に経験するのは現在という時間、場所等の制約のため、極めて限定的となっています。読書はこうした制約を飛び越え、多くの事柄を体験することができます。藤原和博著『本を読む人だけが手にするもの』（日本実業出版社、2015）によると「成熟社会では本を読まない人は生き残れない」としています。つまり本を読むことによって、「想像する力」、「集中力」、「バランス感覚」、「世の中を生きる力」などが磨かれると記されています。

この寄稿文では私のこれまでの「計画性のない読書遍歴」を紹介しながら、学生の皆さんに、限られた学生生活の中で、「効率よく読書をする」ための戦略的読書への取り組みを提案するものです。

1. 子供・青春時代の読書傾向

私は一人っ子で、親も旅館業のため、小学校低学年時代から夜は一人で家にいることが日常的でした。そのせいか、母親はよく本を買ってくれました。しかし当時大流行の「まんが」は買ってくれず、主に少年少女世界文学全集などでした。今でもこのころ買ってもらった、野田たかし『生きていたタロとジロ』（鈴木出版、1959）や『日本百科大事典』（小学館、1964）などが自宅に残されています。

小学校時代は乱読で、面白そうな本を次から次へと読んでいきました。中学に入ると土日もテニスの部活で一時期読書から疎遠になってしまいました。高校では運動部の仲間相互間で文庫本の小説談義が盛んでした。こうしたことが、夏目漱石や森鴎外などの文学小説に触れる機会となりました。また高校の図書館では中央公論社の『日本の歴史』（1965）、『世界の歴史』（1961）、『世界の名著』（1966）などにも出会えました。しかし、大学進学後は部活や資格試験、家庭教師に忙しく、大学での授業や資格試験対策以外の読書は疎かになっていきました。

2. 社会人時代の読書傾向

公務員、のちに大学教員になってからはその時々の課題対応のための専門書やビジネス書中心の読書になってしまいました。ビジネス書ではドラッカー、堺屋太一、大前研一、鈴木敏文、星野佳路、柳井正氏らの本をよく読みました。特にドラッカー『プロフェッショナルの条件』（ダイヤモンド社、2000）は今も座右の書のひとつになっています。また『MBA100人が選んだベスト経営書』（東洋経済新報社、2001）に紹介された本もほとんど参考にしました。さらに、中沢康彦『星野リゾートの教科書』（日経BP社、2010）はリゾート再生コンサルタントである星野氏がどんな本を読んできたかを紹介しており、ここに紹介された30冊の本はすべて買い求めました。

このように仕事中心の読書傾向ですが、時間があつたら読もうと思ひ、『哲学の歴史（全12巻）』（中央公論社、2008）、塩野七生『ローマ人の物語（全15巻）』（新潮社、1992）などがいつの間にか所狭しと書棚を占領しています。休日にはこれらの本に少しずつ挑戦していますが、読破にはまだまだ時間がかかりそうです。

3. 読書に戦略をもとう

最近、三谷宏治『戦略読書』（ダイヤモンド社、2015年）という面白い本に出会いました。この本は三谷氏の読書経験の集大成ということです。三谷氏によるとこの本の目的は、①読者が自らの読書に「戦略」を持ち込み、②そこでスキルと経験を効率よく得て、自己を改造し、③量産機（コモディティ）にならず、オリジナリティのある存在（量産機改造型試作機）になることとしています。そのため三谷氏は読む本を4つに分類して、「ビジネス基礎（今関わっている仕事の基礎を固める読書領域）」、「ビジネス応用（企業事例などのファクト集中）」、「非ビジネス基礎（今関わっているビジネスから離れた分野での学び）」、「非ビジネス新奇（自分にとって、世の中

にとって新奇なもの)」としています。

学生の皆さんは私のような無計画な読書でなく、三谷氏の区分を参考にして、まず専門分野の基本書となるコトラー&ケラー『マーケティングマネジメント（第12版）』（丸善出版、2014）やポーター『競争の戦略』（ダイヤモンド社、1995）を読むべきです。これらの本による知識は学部、学科を問わず、将来、社会に出たときに必ず必要になるものです。また、ヤル気を出すためにはナポレオンヒル『思考は現実化する』（きこ書房、1999）、落ち込んだときにはカーネギー『道は開ける』（創元社、1999）などの自己啓発書も有用です。さらに、広い視野を持つためには、歴史書として前掲の『ローマ人の物語』や司馬遼太郎『竜馬がゆく』（文春文庫、1975）、『坂の上の雲（新装版）』（文芸春秋、2004）などもお勧めです。

学生時代には自分の専門分野の基本書、自己啓

発書、これに歴史書、小説などと計画的に読書に取り組んでもらいたいものです。そして、余裕ができたなら応用的な書物にチャレンジしていきましょう。こうした戦略的な読書の実践により、これまで以上に豊かで充実した学生生活を過ごしていただけるものと確信しています。



むかし、大学生のころ読んだ本について

文学部人間関係学科 教授 大嶋 美登子

いきなり私事ですが、この3月で長らくお世話になった別府大学を退職します。それもあって最近、ふとした時にこれまでのことを振り返ることがあります。このお正月もむかし、大学生だった頃のことを思い出しました。

大学生のころ読んだ本といえば、霜山ゼミを思い出します。霜山徳爾先生（1919-2009）は博学で古今東西の書物や思想に精通しておられる方でした。学生たちにも、多読を求められました。「学を志すもの、心理学や精神病理学に関するすべての重要文献に目を通すことを目標とすべき」、との理念を掲げるのです。本当は原著で読むのがよいが、君たちに外国語を読ませると時間がかかりすぎるので、せめて日本語で読めるものは読破すること。それが霜山ゼミの演習でした。

図書館の心理学系の重要図書が山積みされ、受講生一人ずつに山分けされます。それらの本を読んで、レポート20枚にまとめて提出。翌週は別の本が回ってきてそれを読み、またレポート20

枚。レポートといっても、当時はパソコンもなく、すべて原稿用紙に万年筆で手書きです。400字詰め原稿用紙は清書するだけで1枚15分はかかりました。ということは清書するだけで、5時間かかります。

やっと仕上げたレポートは、翌週、立派な「落第」の印が押されて返却されます。この「落第」印は、霜山先生が手書きで「落第」と書かれる労力を減らすために、1年先輩のゼミ生たちが先生にプレゼントしたものでした。

この演習は、「本当に大変だった。本当に鍛えられた」という思いは強くありますが、肝心の本の内容はどれぐらい理解できていたのかはなはだ疑問です。理解できる以前に、読破できないままレポートをでっち上げたことも何度もありました。途中まで読んで、時間切れとなり、目次、前書き、結論をまとめるという作業です。霜山先生はそれを見越して「落第」印を押されていたのでしよう。それでも、落第レポート作成を通じて、「文

献にぎゅっと目を通す」ということを学べたことは、その後の私にとって財産となりました。

熟読できなくても、本を自分の手に取りパラパラとめくるだけでも、それなりの本との出会いになると今でもそう思っています。

このゼミでどんな本を読んだか、ほとんど忘れてしまいましたが、何冊かは心に残っています。そのひとつは、ロージャズ全集（岩崎学術出版）の数冊が回ってきたときのことです。著者のカール・ロジャーズ（Carl Rogers 1902-1987 全集ではロージャズ）はカウンセリングを体系化した大家です。この週は1回で大冊が4、5冊もあり、持ち帰るのに重かったことをしっかり覚えています。読みにくかったので、翻訳が悪いことにし、例によってとりあえずレポートはでっち上げて提出しました。そしてそのまま、ロジャーズの理論はおもしろ味がないと決めつけロジャーズとは疎遠になっていました。後年、あらためてカウンセリングを学び直しあらためてロジャーズに出会い、当時は全然わかつていなかったことを知るに至りました。

読みにくかったけれど、そのままにできないと感じた本もありました。池見西次郎著「精神身体医学の理論と実際：各論1」（医学書院）です。池見先生（1915-1999）は日本の心身医学の基礎をつくられた方です。この本も大冊でしたが、人間の心（精神活動）と身体がこんなにも関係し合っているのだ、ということを感じを持って読んだ記憶があります。その後、一時期、九州大学の心療内科で池見先生のもとで勉強をさせてもらうことにも、つながっていきます。

霜山ゼミの演習のことを述べてきましたが、そのほかにも大学生、大学院生のころ読んだ本で心に残っている本があります。

大学3年生の夏、アメリカで研究を続けておられた若手研究者酒井誠先生（1937-）の講義を聴く機会がありました。最新の神経心理学的研究に接し、いたく感激しました。ラットの脳を電気刺激することで食行動が変化するというような実験を目の当たりにしたのです。生理心理学、神経心理学、大脳生理学といった分野に引き込まれました。酒井先生はその後日本に戻られ、三菱生命科学研究所に勤務されるようになり、私たちの研究

指導も実に丁寧にしてくださいました。

酒井先生たちとは熟読・輪読をしました。マグーン著「脳のはたらき」（朝倉書店）をていねいに読みました。脳・神経系の解剖学生理学の基礎知識の乏しかった私は、ついていけないこともしばしばありました。私が質問するたびに、「さっきも説明したけれど、、、」と言いつつ懲りずに教えてくださいました。そのほかに、このころ私の手元にあった大切な本は、本川弘一著「大脳生理学」（中山書店）です。脳神経科学は1990年代から急速に進展したので、今とは比べものになりませんが、当時としては脳神経科学、脳の仕組みと脳の働きが体系的にまとめられた本で、私にとって心強い本でした。

熟読・輪読した本にもう1冊、時実利彦著「脳と神経系」（岩波書店）があります。この本は、九州大学医学部心療内科教室の脳神経グループでの勉強会で読みました。大学生、大学院生のころ、ていねいに読んだり、折に触れて開いたりした本たちが、その後の私を支えてくれています。

昔話となりました。

多読ではないし、読むのも遅い私ですが、本は好きな方だと思います。活字がないと寂しい。枕元には何冊かの本が積まれ、活字を読みながら寝る毎日です。昔は読むのをやめられなくなって睡眠不足ということもありましたが、最近は睡眠薬がわりのことがほとんどです。最近はまだ、読んだ内容を覚えていないこともしばしばです。読もうと思いつきながら読んでいないと思って手にした本に、なんと紛れもない自分の筆跡で「読了」と書かれていたりします。けれども幸いなことに、少なくとも大学生のころ熟読した本は、今も頭の片隅には残ってくれており、それらが私の人生の糧となっていることを感じます。





「大人の選ぶ本はつまらない」

文学部国際言語・文化学科 講師 澤西祐典

昨年11月に、姪が産まれた。お祝いには何がよいだろかと兄に訊ねたところ、言葉が話せないうちからでも、絵本を読み聞かせるとよいらしく、絵本を贈ってほしいと頼まれた。そこで次の休日に、さっそく本屋を訪れた。

書店へはよく足を運ぶが、絵本コーナーへ立ち寄ることはあまりない。14匹のねずみの元気そうな姿や、大きなフライパンで、ふわふわの黄色いカステラを作る『ぐりとぐら』の姿を見て、思わず懐かしさが込み上げてきた。『どろんこハリー』は、相も変わらず泥まみれの自分を不思議そうに見つめていた。

昔の（それも記憶と寸分違わない風貌をした）友人たちとの再会に、一通り胸を躍らせた後、ようやく本来の趣旨を思い出し、姪に贈る絵本選びに取りかかった。絵本と言っても、まだ文字が読めないどころか、目が見えるか見えないかの0歳の子どもに贈るのだから、ごく簡単なものにすべきだろう。が、折角なので年齢にふさわしい絵本に加えて、もう少しお姉さんになっても読んでもらえる一冊をあわせて選ぼうと決めた。

女の子だから、酒井駒子はどうだろうか、『ピロードのうさぎ』や『くまとやまねこ』を手にとってみたが、さすがに理解できるようになるまで、時間が掛かりすぎるかなと本棚に戻し、代わりに『ねないこだれだ』に手を伸ばす。けれど、お化けが怖くてトイレに行けなくなっても可哀想だ。下手をすれば妖怪好きになってしまうかもしれない。かと言って『はらぺこあおむし』で虫愛づる姫君になってしまっても責任が取れないし、『かいじゅうたちのいるところ』で怪獣とはしゃぎ回るいたずらっ子になられても困る……ここは『すてきなおくりもの』や『百万回生きたねこ』辺りが無難だろうか、などとあれこれと考えているうちに随分と時間が経ってしまった。

『スーホの白い馬』はないかしらと本棚を探していたところ、小学生らしい女の子とその母親と

祖母らしき三人組が、児童書のコーナーに入ってきた。どうやら、女の子の弟にあたる子どもに贈るプレゼントを見に来たらしい。

「これ、先生が薦めてた本やわ」、「それ、いい本よね」、「でも、この子らは漫画を買ってあげた方が喜ぶのよね」云々と、せっかく買ってあげた本に限って、子どもたちが読んでくれないという話で親たちが盛り上がっていたところ、それまで黙って聞いていた女の子が言い返した。

「だって、大人の選ぶ本は説教臭くてつまらんもん」

学校の先生が薦めたという本が見たくて、殆ど振り返りかけていた私は、思わず赤面し、背中越しに謝る。はい、すみません。

そうなのだ、子供は荒唐無稽なお話が好きだったりする。人道的なお話より、お化けや下世話な話を喜ぶものである。あるいは、動物や小さな子供が、危険に巻き込まれそうになって、ドキドキハラハラする。それだけでよいのだ。それに飽き足らなくなって、つい道徳的な意味を求めてしまうのが大人なのだろう。

それでは、自分の子ども時代と大人への読み物の境界線は、どこにあったのだろうかとふと考えてみる。小学校低学年頃に読んだ『ヤンボウ ニンボウ トンボウ』や『エルマーのぼうけん』は、まだ絵本の世界とつながっていたと思う。動物が言葉を話した。

おそらく、最後に仲良くなった言葉を喋る動物は『名探偵チビー』だったと思う。新庄節美さんが書いた、ネズミの名探偵「チビー」が難事件を華麗に解決する児童書ミステリーシリーズだ（講談社、既刊六冊）。鮮やかな色で染められた表紙が印象的で（例えば「虹色プールの謎」は水色、「黄金カボチャの謎」は黄金色で）、本を手にとっただけでウキウキした記憶がある。たしか小学校四年生のときに学年中で大流行し、図書館にあったチビーシリーズはいつも貸し出し中だった。

動物たちが暮らす街で起こる「虹色プールの謎」、「雨あがり美術館の謎」、「泣き虫せんたく屋の謎」、「首なし雪だるまの謎」、「黄金カボチャの謎」、「一角ナマズの謎」を、世界最小の名探偵であるチビーが助手のキャット君と共に次々に解決していった。おそらくシリーズの最後には、失踪したチビーの両親の謎へと迫る構想だったと思われるが、残念ながらシリーズは完結することなく、今でも六冊目で止まっている（新庄さん、講談社さん、よろしく申し上げます。今でも待っています）。

名探偵チビーシリーズが凄かったのは、児童書でありながら、解決編の手前に「読者への挑戦状」が挟まっていたところだ。つまり、そのページの前までに、事件を解く手掛かりがすべて提示され、読者が事件を解けるようになっていた。

『名探偵チビー』が、本格ミステリーに見劣りしないロジックで書かれていた証である。当時の私は、その論理性に魅せられたわけだが、今になって振り返ると、「読者への挑戦状」が私の読書体験に与えた影響はそれだけでなかったように思う。チビーの「読者への挑戦状」は、そのページに至るまでの読書体験を再検討させ、再構築することを幼い私に促した。つまり、登場人物と一緒にドキドキハラハラする楽しみ方だけでなく、物語を俯瞰するという行為を教えてくれたのだ。

「チビー」に魅せられた少年はその後、岡本綺堂、江戸川乱歩、モーリス・ルブランに夢中になり、エドガー・アラン・ポー、ゴールディング、ヘルマン・ヘッセと読書を重ねて行くことになった。「読者への挑戦状」の頁では、虫眼鏡を覗き込んだチビーが、扉の向こうからこちらを見ていた気がするが、結果からすると、あの扉は大人の読書への扉だったように思う。

同時に、こうやって振り返ってみると、幽霊譚やゴシック小説から犯罪小説へ進み、教育の向上によっておどろおどろしい話から上流階級の秘密へと読者の関心が移り、そして推理小説が誕生するという文学史の発展と個人の心の成長が、同じ軌道を辿っている点も面白いと思ってしまう（西洋が二百年近くかけて辿ったその歴史を、日本は明治維新後、不自然な形で消化してしまった）。

さて、話は戻り、姪へのプレゼントだが、「大人の選ぶ本はつまらない」と言われてしまったからには本気を出して、エドワード・ゴーリーを……というのは、さすがに思いとどまり、黒ずくめの三人のどろぼうが、女の子をさらう『すてきな三にんぐみ』を買って帰ることにした。黒マントに真っ赤な斧を担いだどろぼうたちを見て、よもや「つまらない」とは言うまい。後は、この本が三人組と女の子の出会いのように、姪にとって大切な一冊になるのを祈るばかりである。



絶版児童書の宝庫へどうぞ

幼児・児童教育研究センター所長
佐藤 慶子

別府大学短期大学部では、幼児児童教育研究センターの役割として児童書・絵本・エプロンシアター・専門書の収集に力を入れてきました。その収集した資料は、学生が日々の大学生活の中で、手に取り、実際に声に出して何度も読み返し、授業や実習を通して、子どもと関わるツールとして大切な役割を担っています。

お話を楽しみにしている幼児の前で自信をもって読むことは、すぐにはできませんが、友だちの前で読む経験を通して、少し緊張しながらも笑顔で読むことが出来るようになっていきます。また、今後は保育者・教育者として唯一、児童文化の継承者になって欲しいと願っています。

子どもに今もなお、時代を超えて伝えたい作品はたくさんあるのですが、すでに絶版となっているものが多く保育現場ではなかなか触れることが少なくなってきています。しかし、別府大学附属図書館では絶版になっている児童書や絵本が多く40～50冊、まだ、閲覧できる状況にあり、しかも外国の本を翻訳している児童書が多くあり貴重な資料となっています。

一部を紹介してみると絶版本の中でも稀少とされるフランクリン・M・ブランリー作の「たいよう」という絵本や「金の瓜と銀の豆」という中国の絵本、エミリー・ポープラム作「クリスマスの12日」「ね

えさんといもうと」シャーロット・ゾロトウ作など他に、「ほくのさんりんしゃ」「アントニーなんかやっつけちゃう」「まどのそとのそのまたむこう」など外国の作家の作品も多くあります。

また、宮沢賢治の絵本が1巻～12巻あり、尾崎喜八詩文集の5・6・7集等も開架されており、貴重な資料になります。特に、倉橋惣三選集については、現在の初等教育の神髄と言われ、時代を超えた著書として注目されている中で本学にあることを感謝したいです。

日本の作家の絵本も今は絶版されていますが、偕成社版のなかよし絵文庫こどものとも傑作集の「ほくがとぶ」「ほくぱくぺろり」など楽しい絵本もたくさん手にとって見る事ができるのは大変嬉しいことです。

60年前に初等教育科が創立されて以後、毎年、選書されてきた児童書が時を経て今も、貴重な児童書を手にとって見る事が出来る喜びを是非、これからの時代の学生にも受け継いでもらいたいと思います。

このことは、センターの職員として、歴代の先生方が選定した児童書の多くが、その当時から、子どもに読み継いでいくべき児童書を十分選書し、残してくださったお陰と感謝しています。





別府大学図書館友の会 FOBUL の活動について

司書課程 講師 石川 賀 一

1. FOBUL とは

別府大学図書館友の会 FOBUL (フォーブル) は、本学附属図書館の活動を支援することを目的とした学生サークルです。2015 年度は本好き・図書館好きの 16 名が毎週火・金曜日の部会と日々の図書館ボランティア活動に取り組んでいます。

さて、FOBUL という名称ですが、アメリカを発祥とする図書館友の会 (Friends Of Library) にあやかって、"Friends Of Beppu University Library" と名付けられたことに由来します⁽¹⁾。そんな FOBUL の成り立ちですが、1994 年に図書委員の経験がある学生と司書課程の履修生が中心となって「何か図書館のお手伝いがしたい」と要望したことにはじまります。そのようにしてスタートしたのが、書架整理や返却資料の配架作業といったボランティア活動でした。その後、低迷した期間もありましたが、約 20 年にわたり附属図書館の活動を支援しています。

またボランティア活動と並行して、学生たちによる自主的な活動もおこなわれてきました。これまでの活動を紐解いてみると、部内における読書会や司書課程教員と連携した情報検索基礎能力検定試験⁽²⁾ (現・検索技術者検定) の勉強会の実施、なかには民間利用がはじまったばかりのインターネットに興味をもち、大学のホームページを立ち上げた学生もいました。⁽³⁾ このように図書館だけではなく、その他の関連領域にまで進展させた活動ができるのも FOBUL が持つユニークな一面だと思います。

2. 今年度における主な活動

① 図書館ボランティア：主な作業は附属図書館に返却された資料の配架と書架整理です。書架整理とは、主に資料の背表紙等にある請求記号にしたがって、書架の資料を適切な排列になおす作業です。利用者は請求記号を手がかりに資料をさがすので、書架整理は資料提供において怠ることのできない作業といえます。現在は曜日ごとの担当グループが空き時間を利用して作業にあたっています。また、図書館 1 階の展示コーナーでは、部員がお勧めする本を紹介しています。その他、オープンキャンパスの会場準備や館内案内など、図書館からの要請に応じて活動しています。

② 図書館見学ツアーへの参加：FOBUL は、毎年

開催される司書課程・附属図書館共催の図書館見学ツアーに参加し、企画の手伝いをしています。主に参加募集の宣伝や見学グループのまとめ役を担当していますが、2014 年の見学では、司書課程の学生とともに見学する図書館の選定をおこないました。またツアー後に所感をまとめ、オープンキャンパスに参加した高校生へ見学の様子も紹介しました。

③ 石垣祭への参加：石垣祭では、部員手作りのワッフルを販売しました。

④ 西日本図書館学会研究大会のサポート：2015 年 12 月 5 日、ホルトホール大分で開催された西日本図書館学会秋季研究発表会のお手伝いをしました。今年度の大会は、私が所属する大分県支部が担当だったこともあり、FOBUL の部員にも協力を求めました。彼らのサポートは参加者からも好評で、発表者と交流する機会にも恵まれました。

3. 活動の利点と今後の展望 ～顧問の立場から～

FOBUL の特徴は図書館の活動に関わることができることです。図書館業務や司書との交流から得られる知見は、図書館に対する関心を高めるだけでなく、司書を目指す点においても有益であると言えます。

顧問としての今後の展望ですが、図書館や司書課程の取り組みに参加するだけでなく、学生たちが主体となって図書館や読書に関わるイベントの企画・実施ができるよう支援していきたいと思います。

注

(1) FOBUL の名称は、当時、サークル結成の後押しをした司書課程の佐藤允昭先生 (現・本学名誉教授) によって命名された。

(2) 菅上勝哉「(社) 情報科学技術協会 (INFOSTA) 情報検索基礎能力試験に対する別府大学司書課程の取り組みについて」『司書課程年報』no.10, 別府大学・別府大学短期大学部司書課程, 2007, p.52-57

(3) <https://web.archive.org/web/19961030015412/http://www.beppu-u.ac.jp/>

1996 年に開設された本学最初のホームページ。文学部のページ内にあるリンクをたどると、FOBUL のホームページへアクセスすることができる。

2016 年 1 月 8 日確認